【校是】質実剛健　報恩感謝
佐賀県立武雄高等学校
TAKE OFF press
校長通信　NO.6　R6.06.17
TAKEO Future Frontier
学校 HP
文責　校長　下村　昌弘
E-Mail　shimomura-masahiro@education.saga.jp

想像力をたくましくするということ　－6.23 を丁寧に生き抜く－

先日、那覇市にある首里城の地下に掘られ、1945 年の沖縄戦で軍事的中枢だった旧日本軍の第 32 軍司令部壕の写真が公開された。（右下は日経新聞掲載写真。報道各社の代表による撮影）

まもなく、6 月 23 日を迎える。この日の重要さを恥ずかしながらかつて私は十分認識していなかった。

ある年、仕事で沖縄県に勤める知人の部署に電話を入れた。何度コールしても誰も出ない。「お昼時でもあるまいし、沖縄の人はのんびりしているというからなあ」などと失礼なことを考えながら、時間をおいてまた電話しても状況は同じだった。

そこでハタと気が付いた。「今日はもしかして…」。案の定、その日は 6 月 23 日、“慰霊の日”。旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる日で、沖縄県が条例で定めた休日だ。

8.6 や 8.9、そして 8.15 に並んで日本人が忘れてはならない日だ。

ところで、西ドイツ大統領だったヴァイツゼッカーはかつてドイツが過去についてどのような責任を負い、それにどう立ち向かうかを説いた。一部抜粋する。（下線は下村による）

> 罪の有無、老幼いずれを問わず、<u>われわれ全員が過去を引き受けねばなりません</u>。全員が過去からの帰結に関わっており、過去に対する責任を負わされているのであります。…略…。問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにもまいりません。しかし<u>過去に目を閉ざすものは結局のところ現在にも盲目となります</u>。非人間的な行為を心に刻もうとしないものは、またそうした危険に陥りやすいのです。
>
> 『荒れ野の 40 年ヴァイツゼッカー大統領演説全文－1985 年 5 月 8 日永井清彦訳岩波ブックレット 1986 年』

私たちは想像力をたくましくして物事を考えなければならない。未熟な人はこの想像力のベクトルが小さく弱い。歴史や将来といったいわゆる時間軸を延ばす感覚、他者や他地域といったいわゆる空間軸を延ばす感覚。

最近は人として重要な要素として empathy（感情移入）や sympathy（同情）が取りざたされるようになった。それに関して言うと私は compassion（共感）という言葉が好きだ。「他者と思いを共有する」ということだ。しかし言葉の響きはいいが育ってきた背景や考えの違いを簡単に飛び越えることは容易ではない。想像力が基盤となる感覚だ。

想像力をたくましくすることが人間としての成長の証だと思う。人として信頼できるかもそこにあると感じる。まもなく来る 6.23 を丁寧に生き抜きたい。

体験に学ぶ　－韓国で感じた若者の力－

5 月末から韓国全羅南道麗水（よす）市で東アジアグローカルシチズンキャンプが開催された。本校からも 8 名が参加した。5 泊 6 日の日程で日本・中国・韓国の 3 か国の高校生が一堂に会し、交流やディスカッションをとおしながら最終的に SDGs に関わる提言をまとめ、教

育博覧会の会場で約 100 名の聴衆の前でプレゼンテーションを行った。

課業日にもかかわらず長期に学校を離れることには多少不安もあったが、その分コンピテンシー（特に学びに向かう意欲や態度）は十分鍛えられたのではないかと思っている。

「日本の高校生は礼儀正しく、親切」と韓国の高校生が語ってくれた。逆に日本人から見ると韓国や中国の学生はコミュニケーション力が高く、会話の内容の良しあし以前にとにかく語りかけることによって何かを紡ぎだそうとしている姿勢が印象的だった。

余談だが、同期間中、博覧会の別会場で開催されたパネルディスカッションで県教委が佐賀の高校教育について発表した。その際、韓国の高校生がとても鋭い質問をして会場を沸かせたという。その質疑応答の内容は定かではないが、逞しく生きる若い力を感じる。

本校は自主的・主体的な課外活動を推奨している。この夏に行われる中国貴州省への参加希望も多数が手を挙げてくれた。これから正式な希望調査に入るが、年度末に実施予定のオーストラリアへの海外研修への参加希望者も多くなりそうだ。

世の中の全てを体験することは不可能だが、体験で学んだことは色濃くその人の人生に影響する。高校や大学時代に思い切った体験をしてみることを期待する。それが若さだ。

闇米拒んだ判事の生涯　　－本校生徒も出演－

終戦後の食糧難の時代、闇市の闇米を拒否して食糧管理法に沿った配給食糧のみで生活し、栄養失調で餓死した人がいる。その人は白石町出身の裁判官山口良忠。享年 33 歳。

闇米を食べなければ生きていくことそれ自体が不可能な時代に、自分の目指す“正義”はどこにあるのか、現実と法のはざまに悩みながら生きた清廉の人物だった。

その生涯を描いた『テミスの女神』という演劇が名古屋のキャストを中心に地元の出演者も交えて公演された。(6 月 7 日、8 日。有明スカイパーク。ケーブルワン主催)「テミス」とはギリシア神話にある正義の女神のこと。日本でも最高裁判所にテミス像が飾られているそうだ。

本校からも演劇部の中島愛乃さんが出演し、熱演。戦争に翻弄された判事の生涯を軸に正義とは何か、家族への愛とは何か、戦争の悲劇、社会の矛盾など深く考えさせてくれた。

（閑人閑話）出張が続いた。羽田空港であわててチェックインし、ロビーの自販機で飲み物を購入した。百三十円の商品に五百三十円を投入。商品は出てきたがおつりが出てこない。▼焦った。「くそう、なんでこんな時に」機械の隅に貼ってあった電話番号に問い合わせた。係の人が来るまでにすでに何人かの人が入れ替わり立ち代わり購入。彼らに異常はなさそうだ。これじゃ、俺は証拠のない単なるクレーマーになってしまう。どうなるオレ！▼十分後、係員到着。事情を説明すると現場を検証することなくおつりの四百円を渡してくれた。「飛行機の時間がせまっているでしょう」という言葉を添えて。▼機内は込み合っていた。満席のようだ。降りる際、スムーズに乗客の動きが流れるように隣の女性が棚に上げていた僕の荷物をさりげなく下してくれた。さり気ない笑顔とともに。▼人の世も捨てたものじゃない。というか、心が狭くなっている自分を感じた。ほろ苦い旅の終わりだった。（昌）

【当面の主な予定（6 月後半）】
18 日（火）情報モラル講演会
20 日（木）期末考査（25 日まで）
26 日（水）部活動壮行式（該当部活）
27 日（木）探究
28 日（金）耳鼻科検診（該当者）
29 日（土）進研模試（全）
30 日（日）進研模試（3 年）